

本居宣長の医学と『古事記』

吉川 澄美

東京都

本居宣長(1730~1801)は伊勢国松坂出身の国学者で、私塾鈴屋大人と町医者との二足の草鞋を履いていた。宝暦2年22歳から京都へ遊学し、堀景山、堀元厚、武川幸順に師事して5年余過ごした。遊学中には晩年に成稿する『古事記伝』の底本となる『古事記』(大山為起校訂本)を入手し、『日本書紀』(景山遺本)や刊行前の『日本書紀通証』(谷川士清著)など日本神話に関する書物に出会い、すでに関心を寄せていた。ここでは宣長の医学の学びと『古事記』との接点をいくつか紹介する。

I. 『古事記』の植物

武川幸順のもとで、宣長は宝暦4年から『本草綱目』の会読に参加していた。そして遊学中の標題なしの自筆本(『本居宣長全集13』所収)には『古事記』に関わる事項を多く含む箇所があり、そこには本書が引かれている。

- 1) アシ:『古事記』では葦牙、ウマシアシカビヒコヂの神、葦舟、葦原中国、葦原色許男、葦那陀迦神など植物のアシが多く出てくる。そして『本草綱目』の葦に引かれる『毛萇詩疏』の「葦の初生を葦、未だ秀でざるを蘆、長成せるものを葦と曰ふ」から始まり、荻、萑、兼、蘆などの名を挙げて、葦には数種類あるという時珍の説までの比較的長文を抄出している。
- 2) ニギテ:天照大神の天の岩戸隠れの場面に出てくるサカキ、ヒカゲに加え、白丹寸手、青丹寸手に関連して栲や木綿、杜仲、穀(コウゾ)について複数の項目がある。引用しているのは「兼良」『和名抄』『古語拾遺』『万葉集』『宝基本紀』『周礼』『集韻』などの他に『本草綱目』もある。
- 3) カツラ:葦原中国平定に遣わされた天若日子の逸話で鳴女(雉)がとまった木はユツカツラ(湯津楓)で、火遠理命が塩椎神から海神の宮へ着いたら登って座すように指示されたのもユツカツラ(湯津香木)である。宣長は「月桂」や「杜(カツラ)」の項目を立て、前者では『本草綱目』を引いている。

その他、医学や本草と関係がある事項として、医祖神の大己貴と少彦名、五條天神の朮餅、崇神記の三輪山、木花(コノハナ)などがこの写本には含まれる。

II. 方剂歌

「方剂歌」は処方構成生薬を歌に詠み込んだものである。修学帳『折肱録』には80首、清書版『方剂歌』には54首含まれる。薬物は漢名の他に一字薬名(銘)または一字銘と呼ばれる曲直瀬道三流の記法が混在する。歌には『古事記』の逸話を彷彿させる二首がある。

- 1) 神功散:神功は人参黄芪牛房子に西の地黄を奪ふ芍薬

この歌が仲哀記の神功皇后を想起させるのは「西の地(黄)を奪ふ」である。『古事記』では皇后に憑依した神託は「西の方に国がある。その国を服属させてそなたに授けよう」という内容だったからである。尚、一字銘で「西」は前胡、「奪」は紫草である。「神功」や「神効」の名を持つ幾多の処方中、『万病回春』痘瘡のものが類似する。

- 2) 蘇子降気湯:橘のしたゆく水は淡けれど帰るは甘き西の官田

この歌の「橘」と「帰るは甘き」から連想されるのは、田道間守が非時香菓を求めて常世国を訪れ、甘く馨しい橘の実を手に入れて戻った、という垂仁記の話である。蘇子降気湯は『和剂局方』、『万病回春』喘急にあり、構成生薬は歌と一致し、橘:陳皮、水:蘇子、淡:厚朴、帰:当帰、甘:甘草、西:前胡、官:官桂、田:半夏である。

ところで、常世国は異界の一つで不老不死の概念に通じる。記紀には死生や寿命に関する逸話がいくつかあり、コノハナサクヤヒメもその一つである。宣長の資料として直接残っているわけではないが、堀元厚の講義録『三蔵弁』(田中彌性園)や『三蔵之辨口授』(写字台文庫)が現存している。「三蔵弁」は素霊派と呼ばれた味岡三伯一門が、初学者へ行った権道としての医学伝授である。元厚は講義の中で、懐妊は「自然の妙理」であり、漢籍医書にあるような人為的な理窟では説明できないという文脈でコノハナサクヤヒメを援用している。